

おうさま はなし フレディ王様の お話

むかし ある ところ に、フレディという おうさま
王様が いました。フレディ王は、れいぎ^{ただ}正しく
しんせつ^{おも}親切で、思いやりのある おうさま
王様でした。
テーブルマナーも きちんとしていて、
しょくじ^{まえ} 食事をする 前には必ず、おいしい
しょくじ^{ようい} 食事を 用意してくれた ことで、
コックさん^{れい}にお礼を 言いました。
けれども、お城で 働いている 人の
なか^{ひじょう}中には、非常に マナーの 悪い 人^{ひと}たちも
いました。食事の 前に 手を 洗^{あら}うなんて
ことは 決^{けつ}して せず、パイが 出れば
じぶん^{いちばん} 自分が 一番 大きいのを 食^たべようと
して、さっと わしづかみに するのです。
「ちょっと 失^{しつれい}礼」とか 言うことも なく、
ほかの 人^{ひと}の 前^{まえ}に 手を のばして、ほしい
ものを 取^とります。コックさんにも
だれにも、しょくじ^{かんしゃ} 食事を 感謝^{かんしゃ}したりも
しません。みんな、食^たべ物^{もの}について
もんく^い 文句^いを 言うばかりです。



「また チキンかい! 何で ステーキが 出ないんだ?」と
言う人もいれば、

「デザートが パイですって? わたしは プリンが
食べたいのに!」と言う人もいます。

それで、王様は 悲しくなりました。

(感謝し、思いやりを持ち、ぎょうぎ良くすることが
どんなに大切かを みんなに 教えるには、どうしたら
いいだろう?) フレディ王は 考えました。

そして、ある ことを 思いつきました。

王様は、大パーティーを 開きました。招待状には、
とても 特別なパーティーにしたいので、きちんとした
服装をして、手と顔を洗い、かみの毛もきちんと
とかしてから 来るようにと 書かれていました。

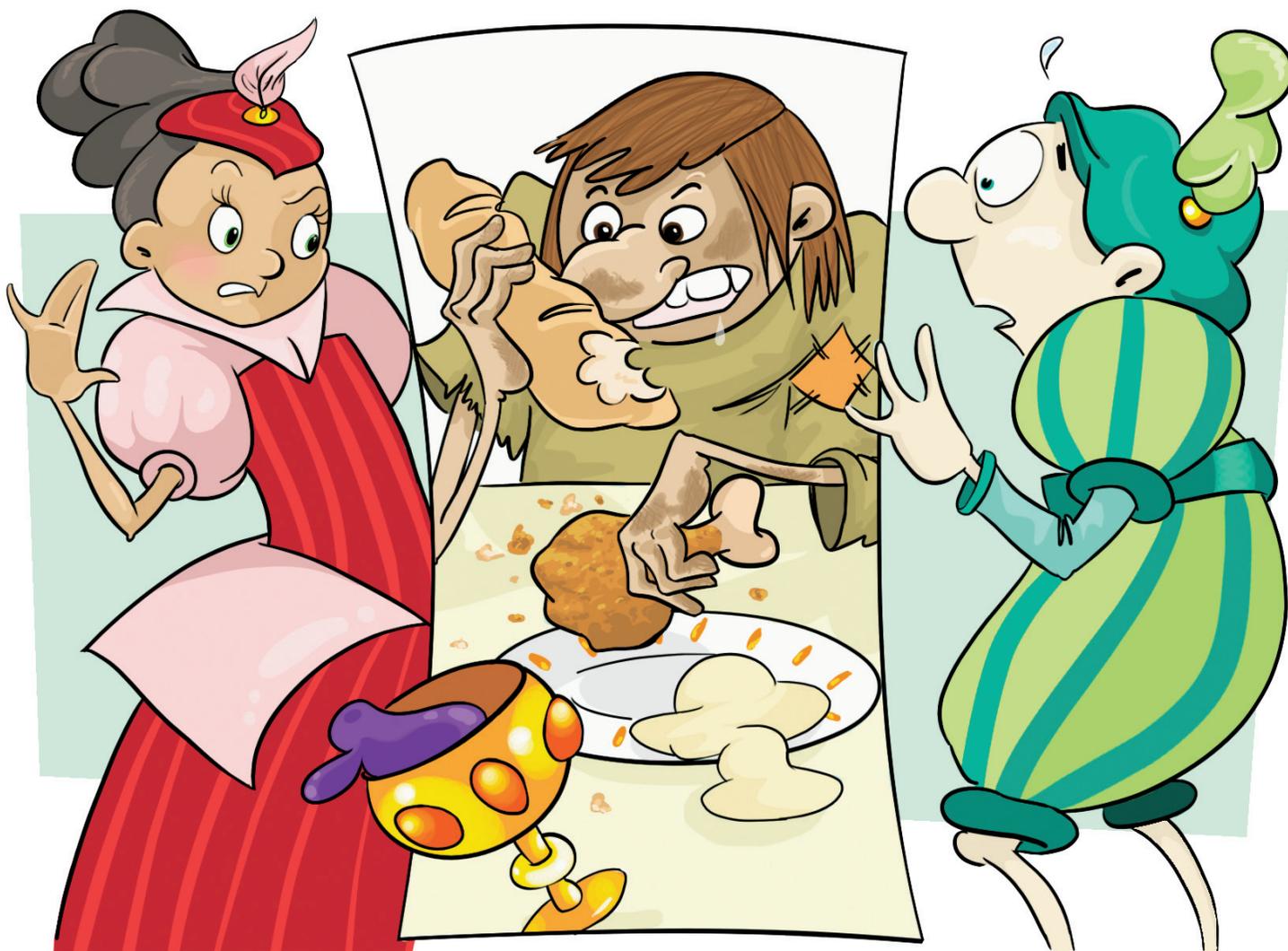
いよいよ大パーティーの日になって、会場は
お腹をすかせた人で いっぱいになりました。けれども、
かんじんの王様が、どこにも 見当たりません。

「フレディ王は、どこなんだ?」 人々は ぶつぶつ
言いました。

「早く 食べたいのに!」と言う人もいました。



その時です。ぼろをまとった非常にきたならしい身なりの人が、会場に飛びこんできました。その人は、王様のいすにすわると食べ物をわじづかみにし、口に放りこんでクチャクチャとむさぼり食い始めました。そばにある物もみんなおしたおされて、めちゃくちゃです。スープもペチャペチャ音をたてて飲むと、指をペロペロツとなめました。お城の番人がこのきたならしい身なりの人を追い出そうとすると、その人は、よごれてくしゃくしゃになった招待状を出して見せました。みんな、あぜんとしてしまいました。



ちょうどその時です。王様の到着を知らせるトランペットが鳴りひびきました。きたないかっこうの人は、手当たりしだいに食べ物をつかむと、さっさと外へ出て行ってしまいました。

会場のみんなが席に着くと、フレディ王が言いました。「みんな、待たせてしまって、すまなかったね。さて、不作法な人が来て、わたしのいすにすわっていたのに気づいた人はいるかな？」

「もちろんですとも！」みんなが声をあげました。「本当にむかつきましたよ！マナーのマの字も知らないなんて。」

「全く、失礼千万でした。」ほかの人も言いました。「ことわりもしないし、『ありがとう』も言わないなんて。」

「わたしも、不作法な人は大勢見たが、さっきの人は最悪だったね。」と、王様が言いました。「だからこそ、彼を招待したのだ。」

「一体、なぜですか？」 だれかが ききました。

「みんなに、不作法なことが どのようにひどいか、そして、良いマナーが どのように大切かを 知ってほしかったからだよ。

わたしたちは みんな、あの人が したような 無礼を 多少なりとも しているものだ。だが、もう だれも、そんな ふるまいは しないように 望むよ。みんな、ぎょうぎよく しようではないか！」 フレディ王が ほほえんで 言いました。

「はい、そう しましょう！」

みんなも、喜んで 答えました。

「わたしたちも、ぎょうぎよく するように 努めます。」

コックさんたちが 料理を持って くと、お客さんは みんな、コックさんに対して ていねいに お礼を 言いました。自分たちの マナーにも 気をつけ、パーティーの 間じゅう、ずっと 礼儀正しく し、「取っていただけますか」や 「ありがとう」を ちゃんと 言いました。

パーティーは 大成功でした。その日から というもの、フレディ王の 国では、食事の 時間は いつも、みんなにとって 幸せな ひととき となりました。

お
終
わ
り

